

【2021/11/24 Release】

01. First Light(Instrumental) 作曲・編曲:野崎洋一
02. 涙のあとにあなたがいれば 作詞:松井五郎 作曲:松本俊明 編曲:野崎洋一
03. I・N・G 作詞:松井五郎 作曲・編曲:野崎洋一
04. Half of me 作詞:kenko-p 作曲:内藤慎也 編曲:野崎洋一
05. フィンガー 作詞:石川あゆ子 作曲:小林信吾 編曲:野崎洋一
06. 推定無罪 作詞:松井五郎 作曲:スキヤット後藤 編曲:河野充生
コーラスアレンジ:西司
07. Smile again 作詞:佐藤純子 作曲:羽場仁志 編曲:河野充生
08. HERE WITH ME 作詞:EDGREN SUSANNE MARIE 訳詞:松井五郎
作曲:小林信吾 編曲:山崎哲雄
09. Do Yah! 作詞:松井五郎 作曲:山川恵津子 編曲:河野充生
コーラスアレンジ:山川恵津子
10. 眠れない花 作詞:松井五郎 作曲:河野充生 編曲:野崎洋一
11. 0時の鐘が鳴るだろう 作詞:松井五郎 作曲:井上ヨシマサ 編曲:河野充生
12. いつかは昔のことになる 作詞:松井五郎 作曲:コモリタミノル 編曲:瀬尾一三

アルバム「I・N・G」に収録されている楽曲には、2020年にデジタルシングルとしてリリースした作品や、制作をスタートした作品が含まれています。このため、ここでは2020年の話からスタートいたします。

2020年という年は、誰もが大きな変化を余儀なくされた年でした。多くの人たちが、職業を追われ、新しい生き方を探さないと成らない時代がいきなりやってきました。一方、オンラインビジネスや、冷凍食品、流通など、急成長する会社もありました。

全てに公平な世界はないと思い知った2020年でした。

この中でもチーム森川は、今やれることは何か?を考えながら、2021年のアルバムに向けて準備をしていました。いつも、走りながら資金集めをしながら、食料を調達しながら走り続けます。なのでエネルギーが途絶え、パタンと止まってしまう危険性もありました。

出来ることは先回りし、一歩でも前に進めるならば、今できることは今やるという具合に、貯金をするようにレコーディングを進めました。

●2020年11月11日 Digital Single 「HERE WITH ME」



<https://youtu.be/Z5WjU9ZDJRE>

少し話は戻りますが、2020年はデビュー35周年記念の年でした。このタイミングで、出来るというと思っていたことがいくつかあります。

その中のアイデアの一つとして、小林信吾さんのメロディーを歌えるといいなと考えていました。周年というのは、気持ちのリセットに有効なタイミングです。そこで、人との再会ということは、リセットに効果的だろうと考えていました。

2020年の春頃に、信吾さんのマネージャーに、作曲依頼の連絡をしました。個人的に、ライブに誘ったりというのは、直接連絡しますが、仕事はマネージャーを通し、連絡をとっていました。この時に、体調をくずしている事を知りました。仕事をキャンセルして、療養する時期に当てているということでした。とにかく、健康第一ですから、分かりましたと電話を切りました。

それでも、信吾さんのメロディーを森川に歌ってもらいたいという気持ちが収まらずにいました。その時に、ふと2018年の夏、小林信吾さんにピアノをお願いし、森川美穂が歌った鎌倉でのライブのことを思い出しました。

この時のライブで、信吾さんがポロリと告白したことがあります。

作曲：小林信吾作品「HERE WITH ME」という英語歌詞の作品についての告白でした。小林信吾プロデュースアルバム「Solista」に収録されたこの曲は、ウォーレン・ウィービーとのデュエットソングでした。

当初この作品は、バーブラ・ストライサンドへプレゼンされた曲だったそうです。コンペディションを勝ち抜き、レコーディングされる予定だったそうですが、途中で変更になり、楽曲が戻ってきたので、タイミングもあい、森川美穂のL.Aレコーディングの時に、ウォーレン・ウィービーとのデュエット曲としてレコーディングしたそうです。

これは、英語歌詞の上に、男性歌手とのデュエットです。森川さんが歌ったのは「Solista」のリリース後のツアーで陣内大蔵さんと歌ったのと、他には、佐藤竹善さん(SING LIKE TALKING)と歌ったことがあるくらいで、近年では一度も歌ったことがありませんでした。

「Solista」が発売されたのは、1996年のことです。22年後に鎌倉・歐林洞でのライブで、信吾さんがポロリと語ったことを、なぜか思い出しました。それで、楽曲を聞き直してみますと、メロディがとてもいい。

これを、このまま2度と歌わないかもしれない、英語歌詞デュエット作品にしておいていいのか?と疑問を抱きまして、一人で歌える日本語歌詞のバラード曲にしようと、松井五郎さんに、訳詞を依頼することにしました。

同時に、2020年に小林信吾さんのメロディーを歌うことで、森川さんの気持ちのリセットにもなるだろうと思いました。

森川美穂は、楽曲にとっても恵まれています。これらの楽曲は、今、そして今後も大切に歌っていきべき作品だと感じレコーディングを進めました。2020年の8月「ひとり夏フェス」で日本語歌詞の歌をライブ初披露し、その後、9月10日にレコーディングしました。

小林信吾さんは、この年の10月4日に旅立たれました。「ひとり夏フェス」での歌を聞いてもらったかどうかはわかりません。しかし、信吾さんのメロディーをこれからも歌い続けてゆく森川美穂を、きっと空から見守ってくれていると思います。

●2021年2月21日 Digital Single 「いつかは昔のことになる」



森川美穂の人生は、側から見ているとロールプレイングゲームのように進んで行きます。進む道を決め、歩いて行き、誰かと出会い新しいものを発見し、宝物を手に入れます。パワーを蓄え、実力をつけながら、次の旅先へと向かっていきますと、そこには、再会が待っています。

作曲家のコモリタミノルさんのメロディーが大好きで、また歌いたいといい続けていました。そんな時、コモリタさんからSNSで森川さんへメールが来ました。その返信で、ちゃんと「またコモリタさんのメロディーが歌いたい、曲を書いてください」とお願いし、いただいたメロディーがこの曲です。

2020年初夏の頃だったと思います。35周年の森川美穂をリセットするために、コモリタミノルさんのメロディーを瀬尾一三さんにアレンジしてもらおうと考えました。コロナ禍で、ライブの中止が続いていた頃、オンライントークライブを11回シリーズでやった最終回に、サプライズコメントを多くの方にいただきました。その中に、瀬尾一三さんからのメッセージメールがありました。

森川美穂 様

35周年  おめでとう 

「教室」からもうそんなに経ってしまったなんて !!



アレンジ&プロデュースの仕事をしていて1番神経質になるのが
デビュー曲にかかわる時です。

理由はそのアーティストの将来を決めかねないからです。
だから多いに悩み、迷い、最後は気合でサウンドを作り上げてきました。

そして貴女の弾けるパワーのキラキラ光る太陽光線の様なヴォーカルを
聴いた時には抱いていたモヤの様なモノが吹っ飛んだ事を覚えています。

それにしても学校帰りに高校の制服でスタジオに来た時、
20歳離れたおじさんはびっくりしてドギマギしてたと思う。
ウーン可愛かった～。

今やこちらは70歳過ぎたオジイチャンになってしまいましたが
機会があれば又ご一緒に。
「イイ女」、失礼「大人の女性」の為のオケを書いてみたいです。

長々と書きましたが、
35周年  本当おめでとう 

瀬尾一三

瀬尾さんから、こんなお祝いのメッセージをいただきました。「いつかは昔のことになる」は、まさしくこの言葉通り「大人の女性のためのオケ」をアレンジしてもらいたい楽曲でした。瀬尾さんから頂いた、この言葉を頼りにアレンジをお願いすることにしました。

コロナ禍でのコンサートの中止の連続が生み出した、オンライントークライブという新しい試みの中で、またもや森川美穂は、瀬尾さんと再会を果たし「いつかは昔のことになる」をアレンジしてもらうきっかけを掴み取りました。

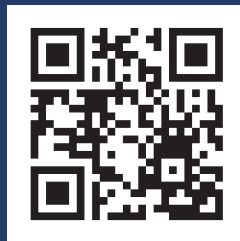
このオケのレコーディングは、2020年9月に行われました。相変わらず、森川さんのスケジュールはタイトで、オケのレコーディングには立ち会うスケジュールが取れませんでした。その後も、コロナ禍での大学の仕事はますます忙しく、そしてお母さまの体調のこともあり、レコーディングはペンディングすることにしました。

11月に森川さんのお母さまは、旅立たれました。この年は、悲しいお別れが続きました。12月5日、この年の最後の配信ライブで、森川美穂は最後に、感謝をこめて「Life is beautiful」を天国まで届くように歌いました。

2021年1月5日、東京のスタジオで待ち合わせをしました。スタッフは早めに入り、準備をし、森川さんを待ちます。

明るく、そして気合がみなぎる、そんな顔つきで森川美穂はスタジオに現れました。この日の歌入れには、松井五郎さんも来てくださいました。

2021年をレコーディングからスタートする森川美穂の姿を記録しようと、映像作家の翁長裕さんも、年明け早々、駆けつけてくれました。



<https://youtu.be/h4-CEYiGTMo>

映像作家の翁長裕さんは、渋谷の街が変わりゆく姿を背景に、森川美穂の心象風景を映し出しました。(※渋谷ロケは、2020年の12月に撮影)

こうして、森川美穂の2021年の幕が明けました。

●2月21日 MZES TOKYO (& Digital Single 「いつかは昔のことになる」Release)

2020年の夏からは、リハーサルスタジオでのライブで頑張ってきたので、2021年からは場所をライブハウスに移そうと、赤坂のライブハウス MZES TOKYO からライブをスタートすることにしました。有観客の予定だったのですが、緊急事態宣言となり、またもや無観客配信ライブとなりました。それでも、まずはライブハウスに戻って来ました。一步、前に進んだという感覚がありました。

この2021年 1st. Liveで、新曲「回帰」が発表されました。

作詞：松井五郎 作曲：河野充生 編曲：野崎洋一

こうして、ライブで最初に披露し、しばらく歌いこんでからレコーディングするという方法は「ユメサライ」「ビニールの傘」以降、継続しています。

「それぞれ」「漂流夜行」「足跡」なども、ライブで最初に歌った楽曲でした。このように体に馴染ませながら、森川美穂の中で歌を育てながら、タイミングが来たところでレコーディングするという方法は、とてもいいやり方だと思っています。

「回帰」というタイトルで2月のライブで初披露しましたが、この曲は2021年の8月にレコーディングすることになりました。「回帰」を含めて、2daysで8曲のベーシックを録音するという、相変わらずハードなレコーディングでした。

2日目のスタジオで、タイトルチューンの「I・N・G」のレコーディングをしているとき、、、

西嶋:これにしよう! ING=森川美穂らしいタイトルだね。

森川:いいですね!

松井:INGの表記は「I・N・G」にしませんか?

森川:いいと思います。

松井:西嶋さん、他の曲タイトルって変更してもいいですか?

西嶋:はい、、、まだジャケット進行はこれからなので、問題ないですけど。

なんでだろう?って思いました。

私は、レコーディングに入る前に、すでに12曲の曲順を決めていました。この曲順を五郎さんにメールしていたか、あるいはスタジオで話をしたのかは覚えていないのですが、五郎さんが書いていない曲も含めて、2日目のスタジオで、全ての曲が出揃い、アルバムの全貌が見えたわけです。曲順も決まっています。

そこで、タイトルを並べた時に、そのタイトルはどのような印象になるのか?

松井:アルバムの曲順でタイトルが並んだ時、このタイトルでいいのか?
ということも、もう一度、考えさせて下さい。

は————。な—る—ほ—ど————。。。。

クリエイティブに終わりはありません。松井五郎作詞作品は、曲により角度を変えて歌詞を書いていたと思いますが、そのタイトルの見え方についても、複数の視点で考える。やれることは、とことん考え抜くことが、松井五郎さんにとっては、当たり前な日常なのです。

松井五郎さんと一緒に仕事をしていますと、いつも自然と背筋が伸びます。クリエイティブに対する姿勢に、暗黙の喝を入れられ、その度に背筋を伸ばし、自分のやるべきことを再確認します。

おい、脳みそ、考えるべきことは本当にそれだけか? お前の頭の出来がいいかどうかは問わない、それは仕方ないさ。でも、決して手を抜くな。サボるなよ。しっかりやれ。

私は、若い頃にみた映画、ダイ・ハードのブルースウィルスが「Think Think Think」と言い続けていた、あのシーンを今でも思い出しながら、出来の悪い頭を叩きながら、アイデアを見つけて行動します。こうして、河野充生曲「回帰」は「眠れない花」というタイトルに変更になりました。

森川美穂はと言いますと、これがもっとすごいのです。ファンの方から、オンライントークイベントの時に質問がありました。「回帰」のタイトルが「眠れない花」に変わったのは、どうしてですか?

「あー、そうですね。なんか、いつの間にか変わっていましたね。」・・・以上。

作品のタイトルは、作家のもので、それは私のテリトリーではありません。私は歌手で、歌う人です。以上・・・ってことなんでしょうね。

まあ、確かにそれはそうなんです。しかし普通なら、もう少し説明するものだと思うのですが、森川美穂はそうしない。ファンの方もこれ以上追求はしません。よくわかってらっしゃる。

右を見ても、左を見ても、すごい人ばかりです。これからも「Think Think Think」と、脳みそに自問自答しながら、精進していこうと思います。

ここからは楽曲ごとに、森川美穂本人解説と、ディレクター解説を併記します。

「First Light」(Instrumental)

作曲・編曲：野崎洋一

【本人解説】

CDのブックレットを1ページめくると、私がどこか遠くを見渡す写真に、なんだか、勇ましいメッセージが書かれています。この言葉は、私が今年の9月に名古屋でライブをやった時に、MCで言っていた言葉をスタッフのふみちゃんがピックアップして、デザインしてくれたものです。そして、その下に、この作品はデビュー曲「教室」のイントロを引用してはじまっています…と書かれています、一体、どこを引用したんですかね？全然、わかんないんだけど私、ハハハハハ。

【ディレクター解説】

森川さんの歌へのコダワリと、それ以外についてのコダワリの無さ、の両極端なところが垣間見える発言でした。もちろん、レコーディングした現場でも説明しましたし「へーそうなんだ」…程度の反応はありました。当然、理解されていると思っていました。しかしあれは、会話の相手へのただの返事だったようです。それにしても、この、「全然わかんない、ハハハ」…には、びっくりしました。CDが出来上がり、車の中でこのオープニング曲を聴きながら見た夕焼けがとても美しかったと、後日、森川さんからメールが来ました。なんとなく、ほっとしました。

「涙のあとにあなたがいれば」

作詞：松井五郎 作曲：松本俊明 編曲：野崎洋一

【本人解説】

今回のアルバムように歌入れをしなおしました。レコーディングする時って、もちろん作品は完成されているんだけど、歌はライブを通して成長していきます。この曲は、2020年5月10日にレコーディングされましたが、その後、ライブで歌うごとに歌い方が変わっていききました。そこでもう一度歌おうということになりました。VERY BEST SONGS 35に入っている歌と「I・N・G」に収録された歌の変化に気づかれた方も多かったのではないかと思います。

【ディレクター解説】

歌手にとって、避けられない宿命として、新曲のレコーディングの時の歌が、一番、慣れていない時の歌だということです。もっと歌いこんでからレコーディング出来ないものかと、ライブで数回歌ってからレコーディングしようと進めた作品もありましたが、すべての曲に対応できるものでもありません。特にこの曲は、コロナ禍がいきなりやってきて、一度も演奏と合わせることもなく、レコーディングスタジオで初めて実際に歌った作品でした。その時の歌は、ベストアルバムの35曲目に収録されていますが、とてもいい歌が録音できたと満足していました。ところが、その後、ライブを重ねるとともに表現が変化していききました。そこで、今回、歌だけ録音し直しました。歌の表情に合わせて、Mixのアプローチも少し変えました。

「I・N・G」

作詞：松井五郎 作曲・編曲：野崎洋一

【本人解説】

今年の7月の1年遅れのアニバーサリーライブのリハーサルの日、野崎さんとあって

森川：まだ曲来てないんだけど、ちゃんと書いてるの？

野崎：書いてます書いてます書いてます

森川：もうレコーディングだから間に合わないのかなあ

野崎：いや、あの、例えばですね。

こんな感じで、サビでこんなメロでファルセットとか使えますか？

森川：いけるいける、なんだ書いてるなら、早くちょーだいよ

野崎：も、も、も一少しなんです。あのコード進行があと一歩で…

そんなわけで、レコーディング3日前にデモテープが出来上がってきて、五郎さんへの作詞依頼にリクエストとしてトップノートがロングトーンになるので「い」母音で書いてもらえると、歌いやすいかもとお願いしたら、その翌日、朝目覚めたら、五郎さんから歌詞がもう届いていたという、本当にびっくりしました。五郎さんは何をお願いしてもすごくて、なんていうのかな・・・そのメロディーが歌ってほしかった言葉がのってくるという感じで、本当にすごいとしか言いようがないです。これね、私とっても好きな楽曲で、仕事に行く時、朝、車に乗ってまずかけるのはこの曲です。この曲を聴いて、よし今日も行くぞ!って自分自身を奮い立たせています(笑)

【ディレクター解説】

このアルバムのタイトル曲です。ここ数年、森川さんのスタッフを経験して気がついた森川美穂の気質、生き方。「・過去を振り返らない・前しか見つめない・今を全力で生きる」野崎さんのデモテープが上がってきたときに、すぐにこのテーマが当てはまると思いました。作詞の松井五郎さんへお願いするときに2つの依頼をしました。

(1)テーマは「走り続ける」です。

(2)森川さんの希望として、トップノートの母音は「い」でお願いします。

依頼したときのメールの文章は、たったこれだけです。このメールを送ってから、数時間後、森川さんが夢の中にいる間に歌詞は仕上がってきました。

「half of me」

作詞:kenko-p 作曲:内藤慎也 編曲:野崎洋一

【本人解説】

これはね、私、作曲の内藤慎也さんの曲が本当に大好きで、、、なんて説明していいのかうまく言えないんだけど、ほんとーに、大好きなんです。メロディーがスッと入ってくるっていうか、、、メロディーがすごいじっくりとくるんです。また内藤さんのメロディーを歌いたいとオファーしたんですが、ちょうど東京オリンピックの前で、内藤さんがテレビ番組での音楽制作がとても忙しくて、新曲を作る時間がとれないということで、既成曲だったのですが、こういう曲があるのですが、どうですか?と提案してくださったのがこの曲でした。そしてこの曲のコーラスは、今、私が大学で教えている古川絵理奈という学生なんですが、声が素晴らしくて彼女の声でこのコーラスをやってみようと思いました。教会の空間に響くようなコーラスに仕上がりました。

【ディレクター解説】

今回、ラテンテイストのサウンドが欲しいと感じていました。内藤さんのスタッフが勧めてくれたのがこの楽曲です。このスタッフとは、花崎雅芳さんです。そうです、あの名盤「Solista」のディレクターです。全く、お見事な選曲と申しますか、森川さんの魅力を知り尽くしているわけですね。森川さんに、原曲を聞いてもらったところ、私、内藤さんのメロディー、好きだな～・・・って、ハートを鷲掴みにされていました。歌いたい作品を歌う。当たり前のことですが、過去にはそうはいかないこともあったことでしょう。レコード会社、プロダクション、タイアップ先の意向、さまざまな立場の人が入り組む世界です。今は「森川さんが歌いたい作品を歌う」、このシンプルな方針でレコーディングしています。

「フィンガー」

作詞:石川あゆ子 作曲:小林信吾 編曲:野崎洋一

【本人解説】

ご存知のように、小林信吾さんの楽曲です。元々のオリジナルは打ち込みだったり、歌フレーズも部分的にエフェクトで加工されていたり、なんか機械的に感じている部分もありましたが、今のうちのバンドでやり始めて、とてもスムーズにじっくりとくるようになり、入れてみようということになりました。野崎さんがミックスも含めていい仕事していて、とにかくアレンジが素晴らしくて、後半のストリングスのフレーズや重なり方がとても好きです。こういう歌は、あまり頭で考えて歌う曲ではないのですが、バンドの演奏に歌わされているという感じです。

【ディレクター解説】

カヴァーとか、セルフカヴァーとか、とくに意識はしていません。ここでもやはり、森川さんが今、歌いたい作品を歌う。ただ、それだけです。実は選曲した段階で「half of me」～「フィンガー」～「推定無罪」という曲の並びを決めていました。アルバムの流れの中で、ラテンテイストで徐々にアップテンポにもっていく、というのが、いい感じになりそうだと思ったからです。これからも、こんな風に、森川さんが「今」歌うといい作品を掘り起こしてみたいと思います。

「推定無罪」

作詞：松井五郎 作曲：スキヤット後藤
編曲：河野充生 コーラスアレンジ：西司

【本人解説】

スキヤット後藤さんの作曲ですね。これ一、ヘンテコな曲ですよ。Aメロ、Bメロ、C(サビ)メロ、って普通この順番で2コーラスそしてもう一度サビを繰り返して終わるとというのが普通のポップス作品なんですけど、、、そういうルールを全く無視して、、、曲がっちゃったって 尖っちゃったって・・・っていうのがまた新しく始まって、、、一体どこへ行っちゃうのかなって、、クリエイターの仕事だなんて思いました。本当に面白い作品になりました。

【ディレクター解説】

ラテンコーナーのトドメみたいな曲を作りたいと考えていました。なんというか、普通じゃないことをしたい。そんな思いが膨らんで来た時に頭の中のどこからか、響くように聞こえてきたと申しますか、、、「ほら、いるよ、あそこにいるよ。」と、ふと浮かんだ名前がスキヤット後藤さんでした。それで出来上がってきたのが、このへんてこりんな構成の楽曲でした。松井五郎さんから、、、構成は、このままですか?と聞かれ「はい」とお答えいたしました。てってけ、てってけ、転がるように走っていったら、あらまあ、もう終わっちゃった。。。こんな曲に、どんな歌詞が結婚してくれるんだろう?と楽しみにしておりましたら、「推定無罪」。いや～、どう考えてもこりゃ、有罪でしょ?・・・と感じまして、間奏に銃声～車がスリップしてガシャーンと事故を起こすシーンをSEで演出しました。イメージとしては、峰不二子がルパンを裏切って、ダイヤモンドを独り占めにするためにルパンを襲うシーンみたいなイメージです。なにが欲しくて、なにを捨てるの? そりゃ誰にも「言えない」よね。

「Smile again」

作詞：佐藤純子 作曲：羽場仁志 編曲：河野充生

【本人解説】

天使の詩が来たよ。ってメールが来たから、天使って何さって思って、添付された歌詞を見たら「おお、天使だ!」って思いました。これ、佐藤純子さんが書かれた歌詞なんですけど、純子さんって日常の切り取りがとても上手なんです。コロナで明日が見えない日々が1年半以上続いて、今やっと日常を取り戻そうと色々な人が頑張っていると思います。当時、、このメロディーが出来てきた頃は、陽性者数の数がすごく多かった時期で、コンサートが出来るのか?とか、思っていた頃でした。そんな時、このサビで「もういちど もういちど 君の声 聞かせてよ 聞かせてよ」っていう言葉がとても胸に響きました。そして2コーラス目のサビで「やさしさに 逢いたくて 今日もまた 生きている 生きている」って、あるんですけど、ここがね、私、ものすごく好きなんです。特別なむずかしい言葉じゃないんだけど、なんでこんなに心に響くのかと。純子さんから聞いたのですが、電車の中でサラリーマンの通勤姿を見ていた時、ふと、思いついたフレーズだったそうです。日常の風景や人の姿を見たときに、純子さんの中で生まれてくる言葉が、この作品の中にも存在していると感じられた1曲でした。

【ディレクター解説】

言わずと知れた、森川美穂 VAP時代の黄金コンビによる最新作です。「Bird Eyes」は、初期作品バードの代表作でもありますね。私は、佐藤純子さんの作詞家デビュー作品の担当ディレクターでもあり、本当に長いあいだ一緒に作品を作らせてもらっています。「縁」というものは誰にでも存在しますが、私と佐藤純子さんのそれを取り持っているのが森川美穂です。作家は歌手がいないと仕事になりませんし、私たち制作者は、歌手がいて、作家や、ミュージシャン、エンジニア、デザイナー、カメラマン、様々な人たちがいて、やっと作品全体を作り上げることができます。やり続けることで、互いに見えてくる景色があります。そこには、森川さんと、純子さんとの信頼関係があります。特に何も言う必要がないと思い、純子さんにただこのメロディーを渡して、「よろしくお願いします」とだけ伝えて歌詞を書いていただきました。

「HERE WITH ME」

作詞:EDGREN SUSANNE MARIE 訳詞:松井五郎

作曲:小林信吾 編曲:山崎哲雄

【本人解説】

久しぶりに「Solista」を聴きなおしてみました。オリジナルは英語歌詞で、ウォーレン・ウィビーと歌ったデュエット曲でした。五郎さんすごいよねー。日本語にしても、こんなにしっかりと歌えるとは。五郎さんがね、よくおっしゃるんですよ。今日もまた一日、自分の新しい未来を生きた、、、っていうことを。一刻一刻と時間が重ねられていく中で、1分後、2分後、のことも、わからない未来なんですよ。でも、その「未来」は今は「過去」になっていて、確かに私たちは、その「未来を生きた」わけです。「静かな肩越し もう夜が明ける またひとつ 未来を生きたね」というシーンがありますが、こういうところが五郎さんばいなーって思うんです。Twitterなんかでもつぶやかれている言葉にも、こういう言葉がふっと出てくるんですよ。あー、五郎さんのフレーズだなーって思いながら歌っています。

【ディレクター解説】

2018年の夏に、鎌倉で小林信吾さんにピアノを弾いてもらったライブでもこの曲は歌われませんでした。英語のデュエット曲であるということで、こんなに素敵でいいメロディーなのに、もしかしたら、もう歌うことのない作品になるかもしれないと思いました。作品があっても、歌えなければいけないのと同じです。そこで日本語で、ひとりで歌える作品にしようと思いました。松井五郎さんの手により、新しい作品として生まれ変わりました。「生まれ変わる」とはこういうことだと思いました。「HERE WITH ME」・・・この作品は、これからもずっと森川美穂と一緒にいます。

「Do Yah!」

作詞:松井五郎 作曲:山川恵津子

編曲:河野充生 コーラスアレンジ:山川恵津子

【本人解説】

これねー、この曲めっちゃカッコよくないですか?こういうタイプの曲、昔はすごく苦手でした。曲は好きなんだけど、リズムがどうもうまくとれなくて、苦手意識があって、気合いとか力技で歌っていた印象があるんですけど、今回は、なんと楽に歌えたことだろう・・・と、本当に、本当に楽に歌いました。ただただ気持ちよく歌いました。この作品はメロディーが先で、詞はメロディーにつけられているのですが、この一体感のある素晴らしい作品は、松井五郎さん、山川恵津子さんというコンビネーションから生まれました。すごい才能の二人だと思いました。

【ディレクター解説】

森川美穂は、色っぽい？ どうなんだろう？ MCを聞くと、微塵もない。でも、歌いだすと、そんな風にも感じる。騙しているわけじゃない。歌っているあいだだけでも、この危うさを楽しもう。山川恵津子さんが描いてくれたこの作品には、森川美穂がデビューした1980年代の匂いがする。洗練されたポップロックで、ほんのりとどこかブラックで都会的。TOTO、ボズ、マントラ、Stuff、様々な洋楽エッセンスが当時のJ-POPシーンに流れ込んでいた、そんな空気を感じる。開放感満開の時代と、そして今のこの空気と、さて、松井五郎さんは、どんな言葉を、この作品に混ぜてくれるのだろうか？ そう、欲望だって生きるエネルギー。悪いわけじゃない。でも、バランスは大切だよと、ここでも、また、正解をしっかりと自分の中でみつけなさいとシンプルに忠告する。「幸せは選べるわ。うまくやりなさい。」森川美穂に言われると、カラッとしていて気持ちいい。濡れているようにも思うけど、結局なんだかサラリとしている。情熱をもって、クールに生きていこう。

「眠れない花」

作詞：松井五郎 作曲：河野充生 編曲：野崎洋一

【本人解説】

これは、今年(2021年)2月のライブで初披露しました。その時は「回帰」というタイトルでしたけど、いつの間にかタイトルが変わっていましたね。この曲のエネルギーは、ほんとに、、、なんとはいいいんでしょね、、、歌詞もメロディーも、そしてアレンジも、、、こんなに、一つ一つのエネルギーが大きなものって他にないかもしれない。歌詞があってメロディーがあって、それが組み合わせられて化学反応が起きることはよくあるんですけど、これってメロディーのエネルギーもすごいし、かつ詞のエネルギーもすごいし、さらにアレンジですごく良かった。でも、作曲の河野さんも、こんなにすごくなるとは思ってなかったって言ってましたけどね。野崎さんのアレンジ・・・イントロからすごくインパクトがあるし、なぜ、あのデモテープからこんなアレンジが生まれたのか？ すごいと思いました。デモテープは、元々、ギターでメロディーを弾いているだけのデモテープで、全く印象の違うものでした。楽器で弾かれているメロディーだったので、どこでブレスするの？とかわからないことも多いメロディーだったんですけど、、、そこに歌詞がきて、ああ、こういうことだったのねとなって、そこにアレンジがきて、ドヒャーってなって、、、劇的に変わっていくことが重なり合って、楽曲が仕上がっていくのが、とても楽しい瞬間の連続でした。

【ディレクター解説】

すごい作品ができた。こういう曲は、依頼してできるものじゃない。その人から、すんなりと生まれる時にだけ、出会うことが出来る作品です。河野さんのデモテープを聴きいた瞬間に、頭の中ではサスペンス映画のシーンが展開されていきました。信頼していいのか？それともこれは罠か？しかし、どちらにせよ命がけだぞ。この女の愛に裏切りは許されない。裏切った時、その報いは死だ。お前にその覚悟はあるのか？頭の中の映像は、嵐のシーンに切り替わった。激しい雨の中で、雷が鳴り響いていた。雷の光に、刃がキラリと光った。岡本太郎の作品で「夜」という作品がある。不気味な青い樹木、イナズマのような炎、そして女性は背中にナイフを隠し持つ。えっとですね。。。Mission: Impossibleの絶体絶命の感じのアレンジをお願いします。野崎さんへ電話でアレンジを依頼をしました。こんな稚拙な説明で、あのサウンドを作り上げるとは恐るべし、野崎洋一。松井五郎さんにも、同じようなメールをしたら、なんとも独特な世界が仕上がってきました。森川さんは、RHで初めて歌った瞬間に、ズドンと心にハマったようだった。このチームは、いつも、こんな風に作品が仕上がっていきます。

「0時の鐘が鳴るだろう」

作詞:松井五郎 作曲:井上ヨシマサ 編曲:河野充生

【本人解説】

井上ヨシマサさんと、去年の3月くらいに、とても久しぶりにお会いしまして、それがきっかけで、曲をお願いしました。この曲を車の中で聴いていると、めっちゃ真剣にCDに合わせて歌ったりしています。自分自身へのメッセージというか、、、人生の真理が歌われているなって思います。頑張れば叶うなんて決して思わない……そうそう、頑張ればいいってもんじゃない事って、確かにありますよね。失うことを怯える手じゃ何もつかめない 答えは先でもどうにかなるもの……そうそう、そうなんです。ゴール(=目標)を決めて生きて行っても、そうじゃない結果になることもありますよね?人生は、すべて自分で決めるだけじゃなくて、もし思ったゴールじゃなくてもどうにかなるって、そんな風に思いながら生きているのかなあって、すごく感じます。こういうことがわかる年齢になったんだなって思います。

【ディレクター解説】

井上ヨシマサさんが、今の森川美穂に、歌わせたいメロディーがこの作品です。森川美穂が「歌いたい作品を歌う」ということをやっているように、作家として、森川美穂に「歌わせたいメロディーを書く」ことを、このメロディーは意志表示しています。メロディーに込められた情熱を受け、その温度を松井五郎さんが受け取り、今度は森川美穂に「歌わせたい言葉」という血液を流し込みます。メロディー、歌詞、に込められた思いを背負い、森川美穂は歌います。この作品から感じる「ガツン」とした波動は三位一体のエネルギーの集合体です。

「いつかは昔のことになる」

作詞:松井五郎 作曲:コモリタミノル 編曲:瀬尾一三

【本人解説】

今年1月にレコーディングしたあと、ライブで歌ってきたのですが、、、毎回、私の中で起こる現象があります。それは毎回、MCでの曲紹介の時に起こるのですがそれでは最後にお聴きください「いつかは昔のことになる」……って曲紹介している時の私の心の中では、、、「どんなことがあったとしても、ぜんぶ昔の事になるんだから、迷わず生きようぜ!」って強い思いの応援歌のつもりで曲紹介をしちゃうんです。それで気合いを入れて、、、♪忘れていくくらいの唇にふれる ふたりはさみしがりや♪って、歌い始めて、あ、いけない、まちがった、、、この曲、恋愛の歌だった……って思うんです(爆笑) これは一体、どういうことなんでしょうか?…それも毎回です。考えてみると、この曲は歌う前に必ずMCで、デビュー曲「教室」の話をして、コモリタミノルさん作曲でアレンジは瀬尾一三さんで、、、という話をするわけです。それが35年を経て、私の中で、また新しいスタートを切るための作品として、用意された作品だと深層心理で感じていて「よし!」って、その思いで、つい気合スイッチが入ってしまうようです。この作品は「今、あなたのことが好きなら、それでいいじゃない」っていう恋愛の歌に仕立ててありますが、それって、全ての事に言えると思うんです。例えば、もしも、今やっていることが間違っているとしても、今、自分がこれをしたって思っているのなら、やり切れればいいじゃないって言われている、そういう応援歌のつもりで歌っちゃう。今度から、間違えないようにします。

【ディレクター解説】

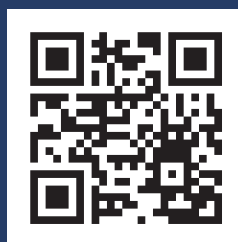
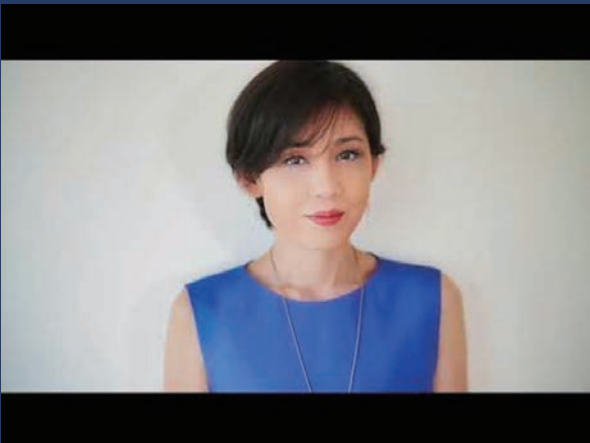
この作品が座る席は、ここしかない。この歌は2021年1月5日にレコーディングされました。振り返ってみると、この作品に、アルバム「I・N・G」のすべてが集約されていました。近年の森川美穂作品の作詞をプロデュースしてくださる松井五郎さんから、森川美穂へもらった言葉を、この「I・N・G」解説シリーズの最後に紹介させていただきます。

Individual Naked Groove

森川美穂を
見ていると
なにもそこまで
と思う
しかし
無理を
してるのではない
無謀と
いうのでもない
流れている
「時」を
無駄にしない
ただ
それだけの事
なのだろう
I・N・G
命は前には戻れない
つまり生きるとは
進行形でしかない
彼女にとって
歌う事は
「いま」を
捕らえるための
儀式なんだ

今、この文章を書いているのは、2022年2月19日です。今年の森川美穂は、まさかの濃厚接触者となり、この為、1週間自宅で自粛生活をするために、京都、名古屋のライブを中止にするという「歌えない」スタートを切りました。

この時代だからこそ、珍しい事件でした。本人はいたって元気なため、誰とも会わず、家にいる毎日を、ゆっくりと過ごしたようです。掃除をし、フローリングを雑巾掛けをして、ピカピカにしたと満足そうに語っていました。このコメントは、ずっと公開しておくものでもありませんが、記録として、YouTubeに限定公開でしばらくひっそりと残しておこうと思います。



<https://youtu.be/ThhShBV3m2o>

このような2022年のスタートも、また「いつかは昔のことになる」わけですね。だからこそ、今を真剣に生きる、そんな森川美穂の生き方が、このコメントにもよく現れていると思います。

「I・N・G」 Music Video

<https://youtu.be/RLvRAZp6r9k>
<https://youtu.be/0mvUEQQ5AVk>



このアルバムには、随所に「今」を、生き、
自分自身の内面から「大切」を見つけ出せと歌われている。
いつ「その時」が来てもいい、生き方をすると決意すること。

「今」を全力で生きること。

アルバム森川美穂「I・N・G」のメッセージがここにある。

